

石橋友也『兄弟（L1F202、L1F211、L1F213）』（2014年）

作者のことば

写真に収められた 3 匹の金魚は、同じ両親から 同時に生まれた兄弟達である。一般に金魚の遺伝は不安定であり、親に似た子供はそう多くは生まれない。本作は 2012 年から続く、金魚をその祖先のフナへと退行させていくプロジェクト『金魚解放運動』の過程で得られた、著しく姿形の異なる 3 匹の兄弟の姿を捉えたものである。

L1F202：赤く丸い体と大きな頭部、羽のような 尾ヒレを有する個体

L1F211：現時点で最もフナ化に成功した個体

L1F213：小型の個体。フナ化が見込めないため、育成の初期に捨て池で過密飼育した結果、極端に小さいまま成熟した個体

金魚はキャンパスや絵の具、ディスプレイと同じく、一種の表現媒体である。生物を表現媒体として捉えた時に、際立った特徴として、時間による形態の変化があげられる。金魚の稚魚は皆同じような姿で生まれてくる。この時の形態は祖先であるフナと殆ど同じである。成長に従って固有の遺伝子と育った環境（餌の種類や水槽の大きさ）によって、それぞれの個性を表現していく。私は金魚の育種を通じて、その表現媒体としての特性とそれが我々に与える美的な効果について研究している。

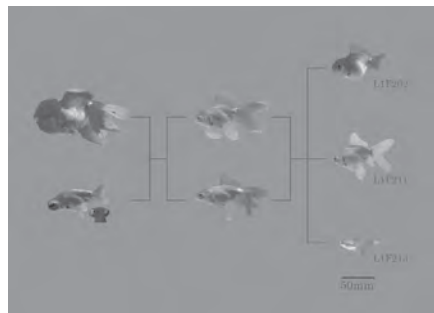


図 1



図 2

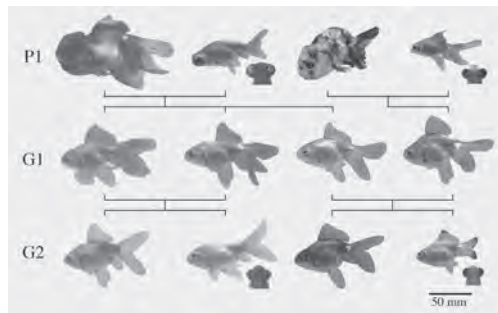


図 3

図 1. 兄弟（L1F202、L1F211、L1F213）の作出過程

図 2. 金魚の稚魚

稚魚の段階では色、形に大きな差は見られない

図 3. 金魚解放運動（2012 ～）

商用の金魚を品種改良して、祖先のフナへと戻していく作品。交雑実験を実際に行い、その過程を作品化している。

金魚はフナに出発し、1700年間の品種改良を経て今日の姿を獲得した人工生命体である。彼らは完全に愛玩を目的としてデザインされており、その姿形から彼らの多くは自然環境下で生き抜く力を持たない。そこで彼らの「野性」を取り戻すべく、金魚に逆品種改良を施しフナの姿へと逆行させ、人間の手から解放することを試みる。

石橋友也（いしばしともや）

1990年生まれ。2011年よりmetaPhorest（早稲田大学生命美学プラットフォーム）に参加。2014年早稲田大学大学院卒業。生物学をバックグラウンドに持ち、科学的な技術や知識を援用しつつ、現代の生命観や自然観に迫る表現活動を行う。『金魚解放運動』は斬新なメディアアートとして高く評価され、文化庁メディア芸術祭審査員特別賞、学生CGコンテスト優秀賞を受賞。

<http://metaphorest.net/residents/artists/tomoya-ishibashi/151>